

敦煌莫高窟における初唐から盛唐への過渡期の一様相

——莫高窟二二七窟試論——

山 崎 淑 子

一、はじめに

中国における初唐期と盛唐期、すなわち唐前期の美術は、東アジアの美術に広く影響を及ぼしたと言われている。この時代の重要な絵画資料たる壁画は、中国全土の中で甘肅省敦煌莫高窟に相当な割合で集中して残っている。しかし莫高窟唐前期窟群については、基礎的な編年研究の専論が未だ発表されてはいない。このような状況の中、莫高窟における初唐期、盛唐期の造形上の特徴を改めて検討することが求められている。

そして、莫高窟における唐前期窟の中でも、二二七窟が重要窟の一つであることは言うまでもない。これまでも、多くの研究者たちによってこの洞窟は論じられてきた。筆者も二二七窟の研究意義を強く認識している者の一人であるが、この洞窟を考察する上で、いつも気になる問題がある。

それは、八世紀初頭という初唐期から盛唐期への過渡期において、この洞窟が様式史上、また制作年代上、どのように位置付けられるのかという問題である。筆者は北京大学考古学系への留学中、莫高窟の唐前期窟群を調査する機会にめぐまれた。そして調査中に二二七窟の中で筆者が認

識したことは、初唐期から盛唐期への過渡期に作られたこの洞窟に、盛唐期の到来を告げる新要素が、確かに表れているということである。そして具体的な分析を進めていくうち、二一七窟といくつかの盛唐期窟との関係性が浮かび上がってきた。

ある時期が次の時期へと移行していくとき、旧要素が完全に消えるわけではなく、あるものは依然として残り、また同時にそれまでには見られなかった新要素が出現するものと考えられる。本稿では二一七窟にあらわれた新要素に焦点をあて、この重要窟の示す造形上の特徴について述べてみたい。

二、考察の前提——制作年代をめぐるこれまでの議論

(一) 初唐期と盛唐期の境界線

前述したように、二一七窟は初唐期から盛唐期への過渡期に造営されたと考えられるが、具体的に何年を以て莫高窟における盛唐期の始まりと考えるかについては、これまでに次のような考え方が示されてきた。⁽¹⁾

a 七十二年説

まず、七十二年すなわち玄宗皇帝が即位した年から沙州が吐蕃の支配下に置かれる七八一年までを莫高窟における盛唐期とする説。この説は、『中国石窟 敦煌莫高窟』第三卷「巻頭の「凡例」(一九八二)や「莫高窟時代別窟一覽」(一九八二)において示されている。この説の根拠は、管見の限りにおいて、文章の形で示されていない。しかし、初唐期と盛唐期という時代区分の概念はもともと唐詩を論ずるときに使われたものであり、この説は、玄宗皇帝の時代から盛唐期とするそれらの影響を受けているものと思われる。

b 七〇五年説

次に、七〇五年すなわち則天武后の治世が終わった年から七八一年までを莫高窟における盛唐期とする説があり、この説が大方の支持を得ていると考えられる。この説が示されている文献として、発表年順に、史葦湘氏論文⁽²⁾(一九八二年十一月)、賀世哲氏論文⁽³⁾(一九八六)、樊錦詩氏のシンポジウム発表要旨⁽⁴⁾(一九八八)がある。特に樊錦詩氏の研究では、二一七窟の制作年代を目安にして、初唐期と盛唐期の境界線が想定されていると考えられる。

(二) 二一七窟の制作年代

二一七窟の制作年代は、おおよそ神龍年間(七〇五―七〇七年)前後とする説が大勢を占めている。表1に二一七窟の制作年代に触れた主要な文献を列挙しておく。

賀世哲氏は、二一七窟の供養者銘と、いわゆる『敦煌名族志』残卷(ボール・ペリオ探検隊敦煌将来漢文文献P二六二五)の記述を元に考証を行っている。⁽⁷⁾賀氏の示された複数の論拠を総合すると、二一七窟の供養者銘よりも後に成立した

と考えられる『敦煌名族志』残卷の成立年代は、七〇八年以降七三三年以前ということになるが、その上で賀氏は二一七窟が神龍年間以前に造営された、初唐期末の洞窟であろうとされている。なお池田温氏は、『敦煌名族志』残卷の成立年代を景龍四年(景雲元年、七二〇年)頃と結論されている。⁽⁸⁾

総じて言えば、則天武后の死去後、玄宗皇帝が即位するまでの七年間(七〇五―七二二年)を、莫高窟における初唐期末と考えるか、それとも盛唐期初頭と考えるかによつ

【表1】 各文献に示される年代観

窟号	中81	史82	時代別	賀86	薄90	總96	段81	関87
三二三	初唐	盛唐	盛唐	載初前後 (六九〇前後)	五期	初唐	載初前後 (六九〇前後)	言及せず
二二三	初唐	盛唐	盛唐	初唐	六期 (開元後期― 天宝前期)	盛唐	万歳三年 (六九七)	四組 (盛唐後期)
一〇三	盛唐	盛唐	盛唐	言及せず	五期	盛唐	言及せず	言及せず
二一七	初唐 (七〇五―七二二)	神龍―景雲 盛唐	盛唐	神龍(七〇五― 七〇七)以前、 初唐末	五期 (貞観後期― 開元前期)	景雲 (七一〇― 七二二)	神龍 (七〇五― 七〇七)	三組 (盛唐前期)

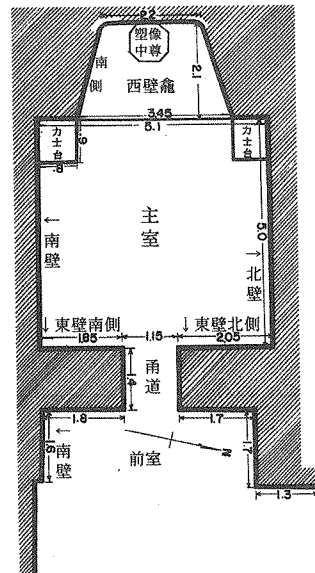
(凡例)

- 中81:『中国石窟 敦煌莫高窟』第三卷(1981)図版タイトル。
 史82:史葦湘氏論文(1982年11月)。
 時代別:『莫高窟時代別窟一覧』(1982)。
 賀86:賀世哲氏論文(1986)。
 薄90:薄小瑩氏論文(1990)。
 總96:『敦煌石窟内容總録』(1996)の各窟の項。
 段81:段文傑氏論文(1981)。
 関87:関友恵氏論文(1987)。

て、唐前期における二二七窟の位置付けに対する見解に差異が生きているのである。しかし、一つの洞窟を造営するのは一定の年月が必要だったであろうから、ある特定の年に二二七窟が造営されたと言い切るには無理がある場合もあり、二つの時代を区分する特定の時点を設定したとしても、その時点を挟んで制作が行われた可能性も考えられるのである。すると現時点では、二二七窟において初唐期窟と盛唐期窟の造形上の特徴がそれぞれどのように表れているのかを見極めることが重要なのではないだろうか。そこで以下において、先学の研究成果を踏まえながら、筆者自身が気付いたことを具体的に述べていくことにする。

三、二二七窟の概要と研究成果

本窟は創建後、晩唐、五代、清代に補修を受けた。主室内壁画の制作年代は、その様式から見て、東壁門口沿部の五代の供養者像以外、いずれも創建当初にさかのぼると考えられる。

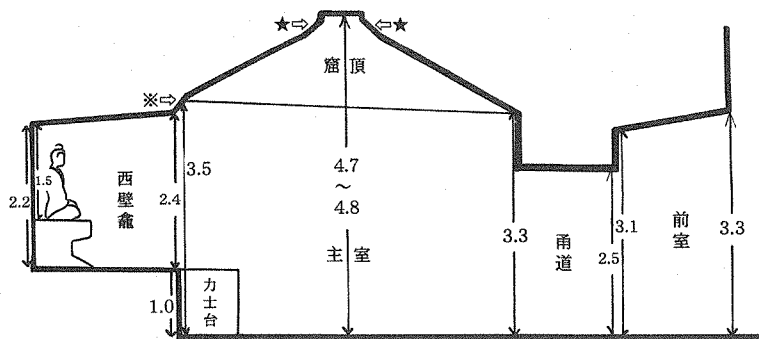


挿図1

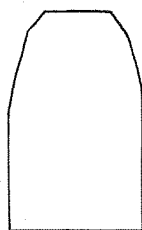
(一) 前室と甬道

前室（挿図1、2）は、西壁から東に向かって一・七メートル⁽⁹⁾ほどが残存している。

甬道側壁（南壁、北壁）に龕は開かれていない。また甬道立面（挿図3）は、上方の幅が少し狭くなっている。⁽¹⁰⁾甬道北壁の供養者像に二箇所、南壁の供養者像に一箇所、銘文が残っている。本窟に残る供養者銘のうち、晩唐のものと考えられているのはこの三箇所である。⁽¹¹⁾前室と甬道が晩唐に補修されたことが知られる。



挿図 2



挿図 3

(二) 主室の規模 (挿図 1, 2)

主室は奥行き (東西壁の間) が五・〇メートル、幅 (南北壁の間) が五・〇メートルではほぼ方形である。西壁龕外の南側と北側には高さ一メートルの力士台が設けられ、力士台の上面が龕底とほぼ同じ高さになっている。側壁の高さは三・三—三・五メートル、窟底から伏斗形窟頂最頂部までの高さは四・七—四・八メートルである。

旧稿にも述べた通り、初唐期の「伏斗頂・西壁一龕窟」は、奥行きと幅が五—六メートル、側壁の高さが四メートル前後、窟底から伏斗形窟頂最頂部までの高さが五—六メートルという規模のものが多数を占める。これと比べると本窟は、奥行きと幅の長さはほぼ標準であるが、洞窟の高さは標準を下回っている。実際洞窟内に入っても、例えば初唐・則天武后期の三三五窟より確かに天井が低い印象を受ける。⁽¹³⁾

(三) 主室—窟頂 (挿図 2)

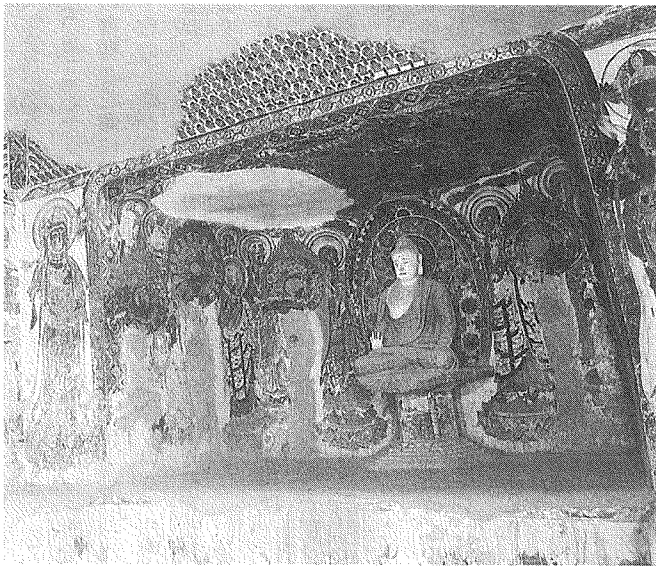
窟頂は伏斗形をなしているが、「四披」⁽¹⁴⁾ (四斜面) の傾斜が、「井心」付近で少し急になっている点に特徴がある (挿

図2★印)。また龕外上部龕沿の面が地面に対して垂直でない(挿図2※印)⁽¹⁵⁾。この面の傾斜は、「過渡期窟」の三二八窟において更に顕著である。

窟頂を飾る装飾文様は次の通り。藻井部「井心」には貞観後期から天宝前期にかけて流行した形式の「宝相花团花」。「井心」の四方には貞観後期から盛唐期全期にかけて流行した石榴花文と、貞観前期から天宝前期にかけて流行した形式の「垂幔」⁽¹⁶⁾。これらの装飾文様については第四章で後述する。

(四) 主室—西壁龕の形状(挿図4)

次に龕内各面の処理について見てみたい。龕内側壁(龕内南側、西側〈龕正壁〉、北側を合わせて側壁と呼ぶ)と龕頂の面の関係はどのように処理されているだろうか。旧稿に述べた通り、初唐期三二九・三三二窟の西壁龕(挿図6)は「上方・横境界線」⁽¹⁷⁾(挿図5)が不明確で、側壁の面と龕頂の面の間を大きな弧状に処理している。このため「外沿・上方隅」も大きく弧を描き、龕頂の面は「上方・横境界線」から龕口部に向かって上方に傾斜していき、龕前に立つ者の目に龕頂の面が自然に入ってくる⁽¹⁸⁾。一方、盛唐期四五窟



挿図4

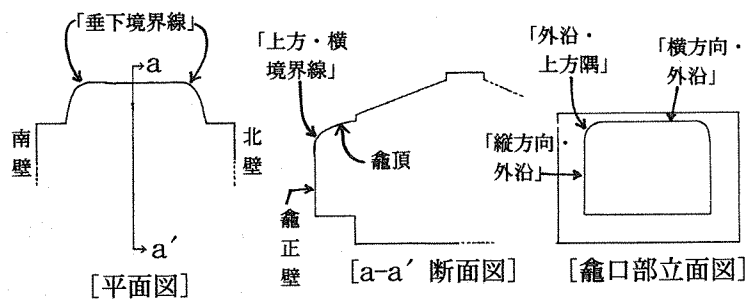


插图 5

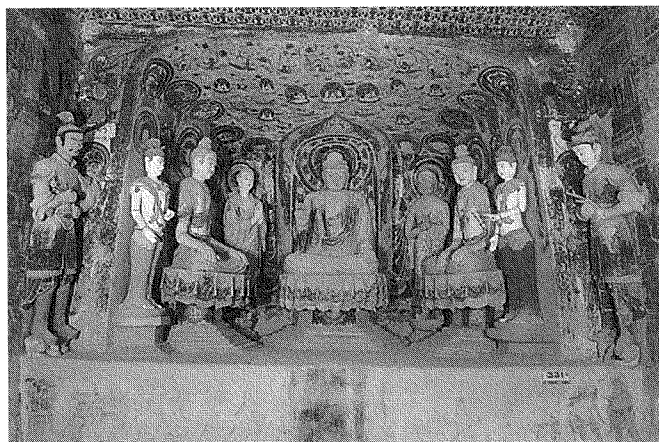


插图 6

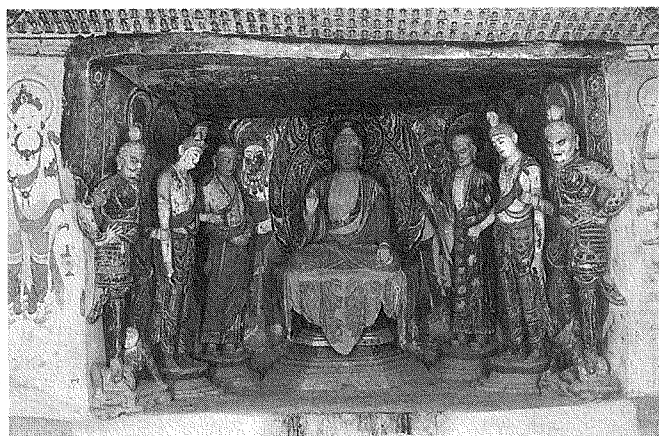


插图 7

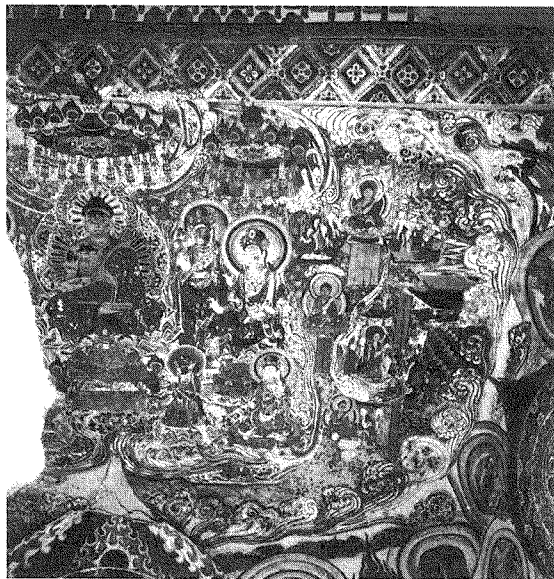
(挿図7)は「上方・横境界線」が極めて明確で、側壁の面と龕頂の面の間に明らかな折れ曲がりがある。このため「外沿・上方隅」も垂直に近い角度で折れ曲がり、龕頂の面は地面に対して平行に近い。二・七窟の「上方・横境界線」は三・三・一窟ほどの大きな弧ではなく、四・五窟ほど明確には折れ曲がらない。その結果「外沿・上方隅」も三・三・一窟より小さい弧を描き、龕頂の面は地面に対して平行に近く、この点、則天武后期三・三・五窟に近い。

(五) 主室—西壁の塑像、壁画、供養者銘

龕内の塑像は、清代の修理をうけた如来形の結跏趺坐像一体(挿図4)が残る。台座には唐代の植物文が残っている。その他の創建時の塑像は失われ、龕内壁面の十大弟子像と八菩薩像、そして塑像の光背が残っている。

龕頂(挿図8)には釈迦說法図、北側には釈迦四衆說法図・釈迦の迦毘羅衛城帰郷の図・羅睺羅出家図といった釈迦にまつわる一連の説話画が描かれている。

「龕外龕沿」(挿図22、表4の「1」)には、ハート形の花弁からなる十字形小花の「一団花二半団花」文様帯⁽²⁰⁾、龕内龕沿(挿図22、挿図8の上端)に斜方格文の文様帯。



挿図8

龕外両側に大勢至菩薩像と觀世音菩薩像(挿図4)。窟内のこの場所にこれらのモチーフを描くことは、初唐・則天武后期の三・三・五窟にも先例がある。

龕外の力士台上の塑像は既に失われている。

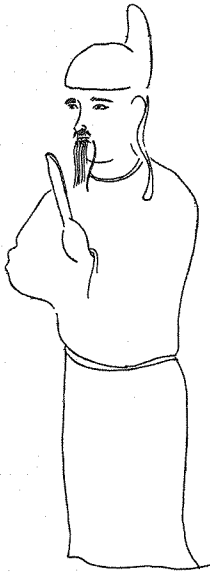
龕下部中央の供養器を挟んで北側には男子供養者群像。

南側には女子供養者群像。供養者銘（陰）「嗣王」「顔新婦張氏」は現在も判読可能。供養者群像は力士台側面にも続いております、南側力士台の東面には建築図が残存している。

西壁龕下部南側の女子供養者群像のうち、第八体目（挿図9）の保存状態はよい。身の丈は目測約五十センチメートルで高髻を結び、ゆったりとした袖の上衣を着て、長裙は胸の高い位置で縛っている。また先端が反り上がった履



挿図9



挿図10

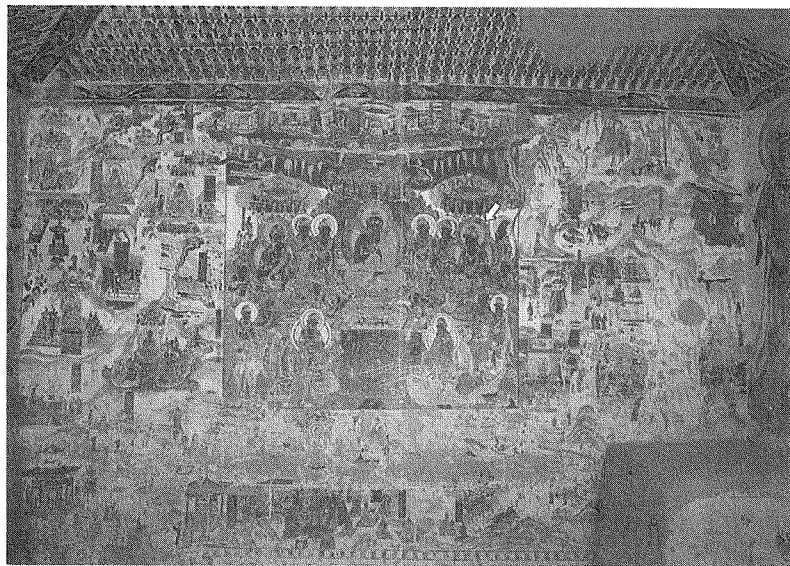
をはいている。いずれも八世紀初頭の服飾の特徴をよく伝えている。

龕下部北側の男子供養者群像は第八体目（挿図10）の保存状態が良い。この供養者像はひげを蓄え、長脚幘頭をかぶり、円領の袍衣は腰の低い位置で帯を結び、胸前に笏をささげもっている。唐前期の一般的な官服である。

龕下部の供養者銘は現在では判読できないものも『敦煌莫高窟供養人題記』（二九八六）に収録されており、これらによって本窟が『敦煌名族志』残巻に記される敦煌の名族陰氏によって造営された、陰家窟であることが知られ、氏族と唐王朝との関係に関する研究において、貴重な史料を提供してきた。⁽²³⁾「隋・唐以来きわだつて名族となつた」と記される陰氏が施主となり造営された本窟は、当時の莫高窟における高水準の技術をもつて制作されたと考えられる。

（六）主室——南壁（挿図11）

全壁面に大画面構成の法華経変。法華経変は莫高窟では隋代から作例があるが、初唐期では西壁龕頂に見宝塔品を表す例がほとんどである。⁽²³⁾法華経変のうち、窟内壁面の中

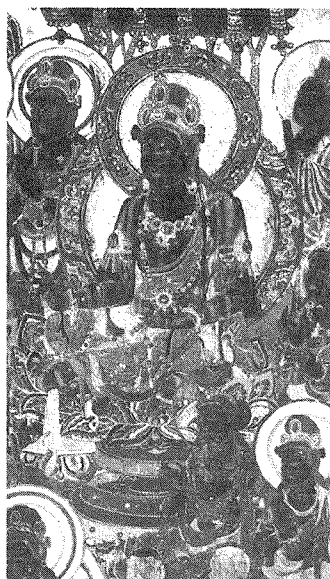


挿図11

で面積最大の南壁あるいは北壁全面を使った大画面構成のものとしては、本壁は最も早い作例である。⁽²⁴⁾
 この法華経變の左右脇侍菩薩坐像が、同一の原図、「型」から描き出されていることを、筆者は旧稿で述べた。⁽²⁵⁾ 本壁左脇侍菩薩坐像（挿図12、13）は、盛唐期の一〇三窟南壁・



挿図13



挿図12（挿図11矢印の位置）



挿図15



挿図14



挿図16

法華經變の右脇侍菩薩坐像（挿図14、15）とも顕著な形状上の近似性を示しているため、両者を描き起こして一方を反転させ重ねあわせると、挿図16のようになった（実線は二一七窟、点線は一〇三窟）。両者も同一の「型」から描き出されていると考えられる。宝冠や胸飾は、その位置は原図に基づき、細部の形状は個々の画工の手によっているのだろう。法量は、一〇三窟の方が膝下が長い。挿図16に示した部分が両者同寸に近いのだ。

両者は共に、莫高窟においてさほど作例の多くない、大画面構成の法華經變中の主要尊像であることに注意したい。同じ題材の同一モチーフに同一の「型」が使われた可

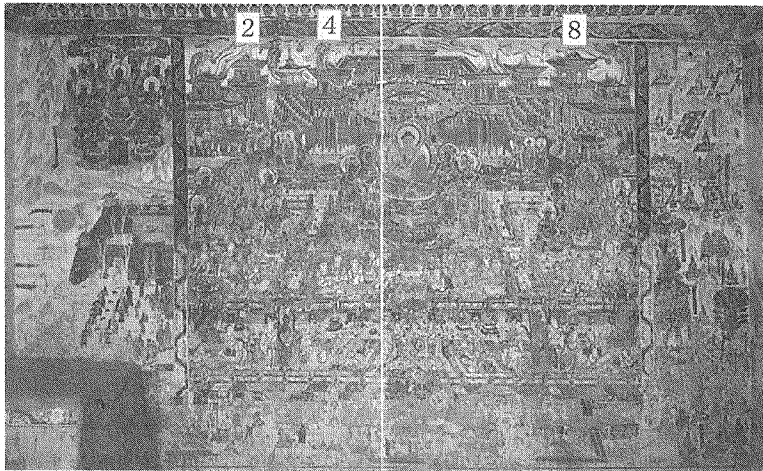
能性があるのである。一〇三窟に対する各文献の示す年代観を表1に示したが、この洞窟を盛唐期の作とすることに異論が唱えられたことは管見の限り見当たらない。二一七窟とこのような盛唐期窟との間の、「型」を介した関係性が浮かび上がってくる。

さらに南壁西側の化城喻品・提婆達多品の山崖の表現方法については、「皴法と呼ぶべきものの萌芽」をもみせるとして、東大寺伝来法華堂根本曼荼羅（ボストン美術館蔵）など盛唐期の山崖表現に直接つながる新要素であるとの先学の指摘がある。⁽²⁶⁾

(七) 主室 北壁 (挿図17)

全壁面に観無量寿経変。阿弥陀浄土を中台に、向かって左側と下縁に序分義、右側に十六観の外縁が加えられたこの構成は、莫高窟における阿弥陀浄土変相図の系譜の中で、本例が最も早いとされている。⁽²⁷⁾

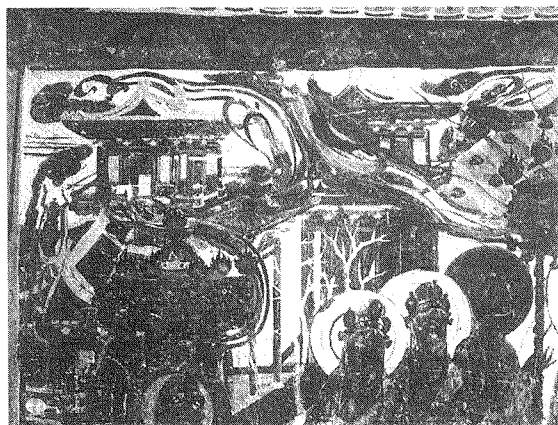
前述したように、南壁における山崖表現が盛唐期の諸作例に直接つながる新要素であったのに対し、本壁東側「日想観」の山と雲と太陽の表現については、「南北朝時代からのアーケイックな伝統形式」、すなわち旧要素であると



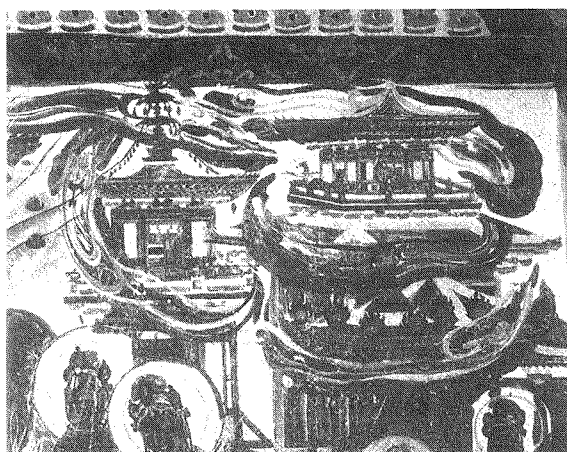
挿図17

指摘されている。⁽²⁸⁾

中台には、阿弥陀浄土を象徴するモチーフとして建築図が描かれている。⁽²⁹⁾ そして本壁の建築図が、ある原図に基づいて描かれていることを推測させる資料がある。それは一二三窟南壁（挿図18a、b）の資料である。⁽³⁰⁾ 一二三窟南壁に



挿図18a

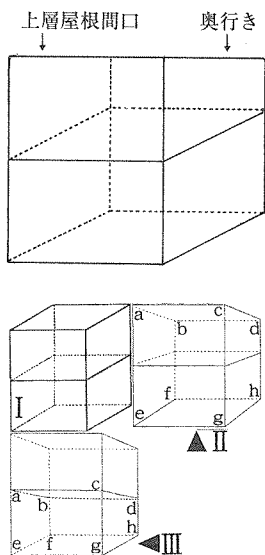


挿図18b

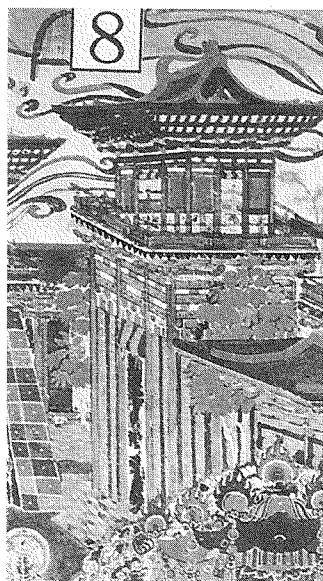
は計五つの建築図が描かれており、これらのうち東側の二つ（挿図18a）の形状が二二三窟北壁第二・四番（挿図21・17）に酷似している。いま、建物の屋根を取り外したと想定し、直方体によってこれらの透視図を表すと挿図20上段のようになる。

唐前期の大画面の浄土変に表される建築図は、透視図法によって三類型に大別できることを旧稿で述べた。⁽³¹⁾ 大雁塔のような高所から対象の建物を俯瞰視して描いたもの（Ⅰ）、ある建物の上層から対象の建物を見て描いたもの（Ⅱ）、ある建物の下層から対象の建物を俯瞰視して描いたもの（Ⅲ）をそれぞれ参考にし、壁画の原図が作成された結果、挿図20ⅠⅡⅢの三類

型が生まれたのだろう。⁽³²⁾但し参考にしたのは奥行きの線の斜度の扱いに關してであつたようだ。画家が建物を見た通りに描いたなら、挿図20 c dとg hすなわち奥行きの線が斜交するだけでなくc dはa bとも斜交し消失点をもつ



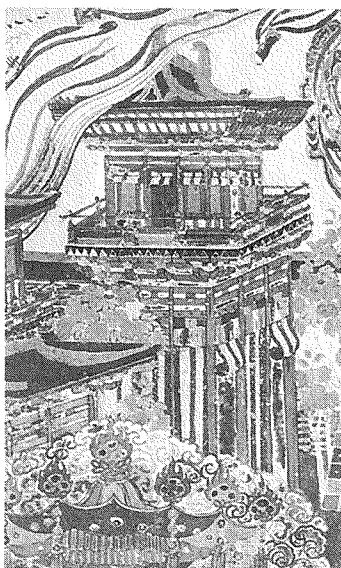
挿図20



挿図19

はずである。しかしⅡもⅢもこのような図法に合つた図ではない。画家は実空間においてa bとc dが平行關係にあることを経験上知っているので、見えた通りにではなく経験上の認識に拠つて原図上に平行に描いたのだ。

挿図20上段の形状は、Ⅱに近いものの、上層屋根の間口の線と奥行きの線が平行である点が三類型のいずれとも異なり、同様の例は初唐期の大画面浄土変中に極めて少ない。二一七窟北壁第二・四番と一一三窟南壁東側の二つの類似性は目立っている。二一七窟北壁第八番(挿図19)、一二三窟南壁西端(挿図18 b右)も同様だ。屋根の大棟の傾斜具合や基壇が磚から成っているとどこも似ている。



挿図21

ここで二一七窟との関係性が浮かび上がる一二三窟は、六九七年にあたる紀年銘があったとされる一方、表1に示した通り、盛唐期窟とされることが大変多い洞窟である。

特に文様に関する先行研究では、開元後期以降天宝前期以前に分類されている。後述の文様分析によっても、この一二三窟には二一七窟との関係性が見出される。

(八) 主室—東壁

法華經變觀音普門品。門口北側沿部には五代に描き加えられた沙門洪認供養者像。門口沿部が唯一、主室内で創建時より制作年代の下る部分である。

(九) 暫定的結論

以上のように、二一七窟は龕形は則天武后期窟に近い点があり、経變の構成の上では、法華經變、觀無量壽經變に初唐期窟にない形式が見られ、山崖表現には新旧両要素が、また大画面の経變における主要尊像と建築図に見られる原図の使用には盛唐期諸窟とのつながりが見られた。次に本窟に表れた装飾文様の特徴について見てみよう。

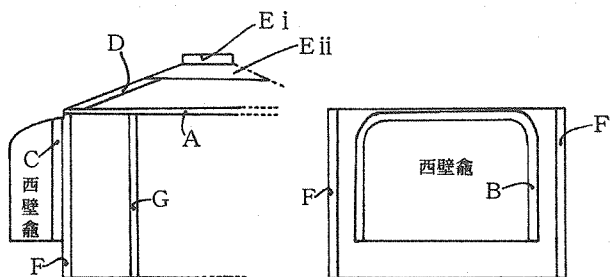
四、二一七窟の装飾文様

(一) 考察対象の選択

ここで装飾文様の考察対象と分析方法について確かめておきたい。本稿では、二一七窟の装飾文様との比較資料として、註12に列挙した洞窟群のうち、「伏斗頂・西壁—龕窟」だけでなく、非「伏斗頂・西壁—龕窟」、すなわち中心柱窟や、方形窟の中央に仏壇を設けた洞窟なども資料収集の対象範囲内におさめた。そしてこれらの洞窟を、次節の方法によって分析した。

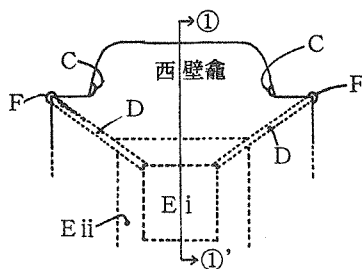
(二) 文様の分析方法

装飾文様の描かれる窟内位置を薄氏論文と同様AからHに分類し、挿図22に示した。そして考察対象窟のAからHにどのような文様が描かれているのか、全資料を収集した。収集にあたっては、筆者が窟内で集めた資料と、薄氏論文によって得られる資料、東山健吾氏撮影スライド、公開されている各種図録⁽³⁴⁾を使用した。



【①-①' 断面図】

【西壁立面図】



【平面図】

A：“頂壁間横辺飾”（窟頂と側壁の間の，横方向の文様帯）
 B：“龕外龕沿” C：“龕内龕沿” E i：“井心” E ii：“藻井辺飾”
 D：“四披斜辺”（窟頂・四斜面間の縦方向文様帯）
 F：“四壁相接縦辺飾”（各側壁間の縦方向文様帯）
 G：“分隔壁画辺飾”（各題材を区分する，縦方向文様帯）
 H i：“頭光中心” H ii：“頭背光辺飾”（頭光・身光の文様帯）

挿図22

【表2】

窟内位置（挿図22参照）	文様の類型	当該類型の見られる時期
E i	“側捲弁宝相花” II	五－六期（貞観後期－天宝前期）
E ii	“素紋帳” II	四－六期（貞観前期－天宝前期）
H i	“蓮花” IV	五－七期（貞観後期－建中二年）
“連綿式連続図案” A, D, E ii, H ii	“石榴花” IV	五－七期（貞観後期－建中二年）

(三) 二一七窟の文様をめぐる問題

莫高窟の装飾文様については、特に薄小瑩氏と関友恵氏によって、これまでに大きな研究成果があげられている。

薄小瑩氏論文(一九九〇)における、二一七窟の文様に関する記述を表2に整理した。薄小瑩氏は論文の中で独自の時代区分を行った結果(表3)、二一七窟の制作年代は、文様の面から見た場合、薄氏分類の第五期(貞観後期から開元前期)に位置付けられるとしている。

【表3】 薄小瑩氏論文(1990)における年代区分

時期	期間
第三期	隋・大業後期～唐・武徳年間
第四期	貞観前期
第五期	貞観後期～開元前期
第六期	開元後期～天宝前期
第七期	天宝後期～建中二年(781)

表3を見て気付くことは、薄小瑩氏論文の分類による第五期が、貞観後期から開元前期と、ほかの時期に比べて長期間にわたっていることだ。この第五期には貞観後期、則天武后期、そして開元前期が含まれており、大きな時代様式の変

化が起こった時期をいくつも含んでいる。

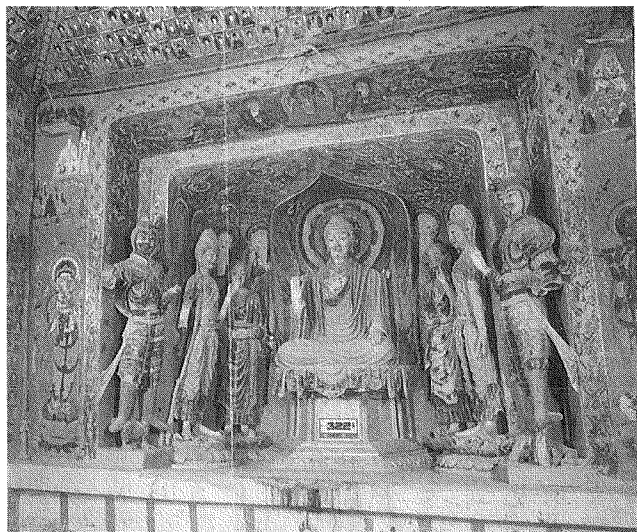
薄氏論文は、洞窟内でも特に藻井部“井心”(E_i)⁽³⁵⁾の文様を軸にして論旨が展開されている。それは、“頂壁間横辺飾”(A)や“龕外龕沿”(B)、“龕内龕沿”(C)、“四披斜辺”(D)、“藻井辺飾”(E_{ii})、尊像の頭光や身光の文様帯(H_{ii})など、“細長い区画に描かれた文様帯”が、“井心”(E_i)という「方形の大区画中央に描かれた団花」の一部を単位文様としているからであり、なおかつ、洞窟の中で“井心”が一番先に制作されたと考えられるからである。また、問題となる第五期は、波状に伸びる唐草形式の石榴花文と、団花形式の“側捲弁宝相花”⁽³⁶⁾を中心とした植物文様が大いに発展した時期として捉えられている。そのためか、本稿の考察対象窟における「細長い区画の文様帯」の中で、直線から構成される幾何学文が言及の対象外になっている。

莫高窟では幾何学文はまず北魏窟に多数見られ、西魏以降少なくなっていく。⁽³⁷⁾隋代には斜方格文の文様帯が見られ、斜方格文は塑像の衣上にもよく表された。

時代が下って初唐期にも幾何学文は見られる。初唐期・盛唐期における幾何学文の代表的なものと、斜方格文と



挿図24



挿図23

亀甲文がある。初唐期窟では、まず三三二窟西壁の「龕外龕沿」(B)に斜方格文が見られる(挿図23、24)。下地は赤茶色で、「三曲雲弁」(先端が三つに分かれた花弁)から構成される十字形小花が単位文様となり、「細長い区画」の中に「二団花二半団花」のパターンで配置されている。「三曲雲弁」は濃い茶色、薄い茶色、黄緑色、落ち着いた青色で塗られており、全体的に落ち着いた色調になっている。この単位文様の間が菱形に区切られて斜方格文となっている。この三三二窟は、隋窟に隣接していることや、隋代に流行した複式龕の形式を踏襲していることから、貞観期二二〇窟以前に造営されたと考えられる。三三二窟に斜方格文があらわれた後、幾何学文は一旦断絶する。

ここで、「細長い区画」の中に「二団花二半団花」のパターンで配置される花文に注目してみよう。二二〇窟南壁の中尊と左右脇侍菩薩立像のH ii、貞観期二二〇窟より早いと目される二〇九窟E iiには「細長い区画」に宝相花文が「二団花二半団花」のパターンで配置される例が既にある。「細長い区画」に「二団花二半団花」⁽³⁹⁾あるいは半団花⁽⁴⁰⁾連続のパターンで宝相花文が配置される例は、他に七一、三三一、三三四、則天武后期の三三二、三三五窟などに多

数見られ、団花形式の宝相花文が大いに発展するのである。

そして、幾何学文がかなり目立った形で再び表されるのが、二一七窟C（挿図8の上端）のほか、三二三窟B（挿図25）、二〇五窟G（挿図28）、一二三窟C（表4の「5」・D（挿図30）・E iiなのである。二一七窟西壁の「龕内龕沿」（C（挿図8の上端）は、「細長い区画」の中に十字形小花が「一団花二半団花」のパターンで配置され、その間が菱形に区切られている。斜方格は黄緑色、青色が交互に塗られ、三角形の中は茶色に塗られている。全体として黄緑色、青色、茶色、灰色がかった青色の四色が使われており、前述した三二三窟B（挿図23、24）に比べてかなり強烈な印象を与えている。

この二一七窟には、斜方格文の他にどのような文様が表されているのか、そしてそれらと同じものが、他のどの洞窟に出てくるのか、薄氏論文（一九九〇）において言及されていないものを示したのが表4である。

次に、斜方格文以外の幾何学文の見られる洞窟を見ていくことにする。

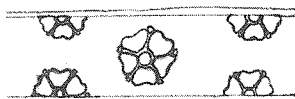
（四）三二三窟との比較

三二三窟の「龕外龕沿」（B）（挿図25）と「龕内龕沿」（C）（挿図26の上端）には亀甲文が表されている。洞窟に入った者がまず目にするのは、正面の西壁龕とその中の中尊であるが、西壁のBという大変目立つ場所に亀甲文が大きく表されていることに、かなり強烈な印象を受ける。

この亀甲文の構成原理は、前節でふれた二一七窟の斜方格文と同様、「細長い区画」にハート形にくびれた花卉をもつ小花文が「一団花二半団花」のパターンで配され、その間が六角形に区切られるというものである（挿図27）。

このように幾何学文の再興という点で二一七窟との共通性が浮かび上がってくる三二三窟であるが、この洞窟を初唐期窟とするか、それとも盛唐期窟とするかについては、これまで様々なことが言われてきた。先学の見解を表1に整理した⁽¹⁾。いずれにせよ、三二三窟の制作年代は初唐期であつても盛唐期に近く、詳細については検討の余地が残されているといえよう。このような洞窟に幾何学文が見られることは、二一七窟の位置付けを考える上で比較資料となる。

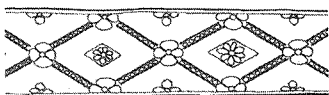
217窟以外の洞窟の作例



(山崎原図)

[3] 123 B ※
[盛] 《開元後期－天宝前期》

その他,
202 B, C [盛] 《淘汰》: 五弁
205 G (西壁南側) [盛] 《言及せず》: 六弁
387 C [盛] 《貞観前期－開元前期》: 五弁
45 G [盛] 《開元後期－天宝前期》: 五弁



[5] 123 C ※ (山崎原図)

その他,
123 E ii
387 B



[7] 103 G (北壁) ※

(山崎原図)



[8] 387 G (南壁) ※

(山崎原図)



(山崎原図)

[11] 205 G (南壁)



(山崎原図)

[14] 71 H ii [初] 《貞観後期－開元前期》

その他, 335 B [初] 《貞観後期－開元前期》, 68 B [初] 《貞観後期－開元前期》



[15] 205 H ii

(南壁経变中尊の頭光)

【凡例】[] 内の数字: 図版番号。

アラビア数字: 莫高窟の窟番号。

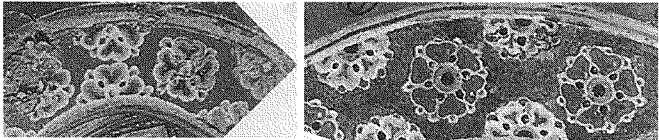
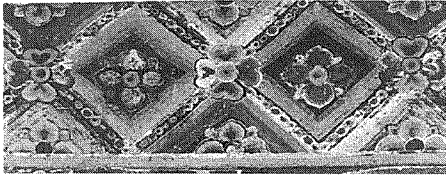




アルファベット: 挿図22を参照。

[]: 「時代別窟一覧」(1982) に示された時代区分。[盛] は盛唐, [初] は初唐。

《 》: 薄小瑩氏論文(1990) 表4 に示された時代区分。《淘汰》は薄氏論文において考察対象から削除されている洞窟。薄氏論文の註5 参照。

窟番号に※を付したもの: 筆者による調査時のスケッチ。

【表4】 莫高窟217窟と他の洞窟の装飾文様の比較

窟内位置／	217窟の作例
B・H	 <p data-bbox="241 395 340 424">[1] 217B</p> <p data-bbox="542 395 837 424">[2] 217Hii (西壁龕内北壁頭光)</p>
C	 <p data-bbox="695 596 874 624">[4] 217C斜方格文</p>
H	 <p data-bbox="241 807 792 831">[6] 217Hii (南壁右脇侍菩薩坐像の身光) [6] の単位文様</p>
H	 <p data-bbox="241 991 538 1034">[9] 217Hii (西壁龕内北側) (西壁龕内南側頭光も同様)</p> <p data-bbox="598 991 852 1034">[10] 217Hii (南壁右脇侍菩薩坐像の頭光)</p>
H	 <p data-bbox="241 1214 519 1241">[12] 217Hii (北壁中尊の身光)</p> <p data-bbox="598 1214 913 1241">[13] 217Hii (東壁門上中尊の頭光)</p>
G	 <p data-bbox="241 1422 407 1444">[16] 217G (北壁)</p>

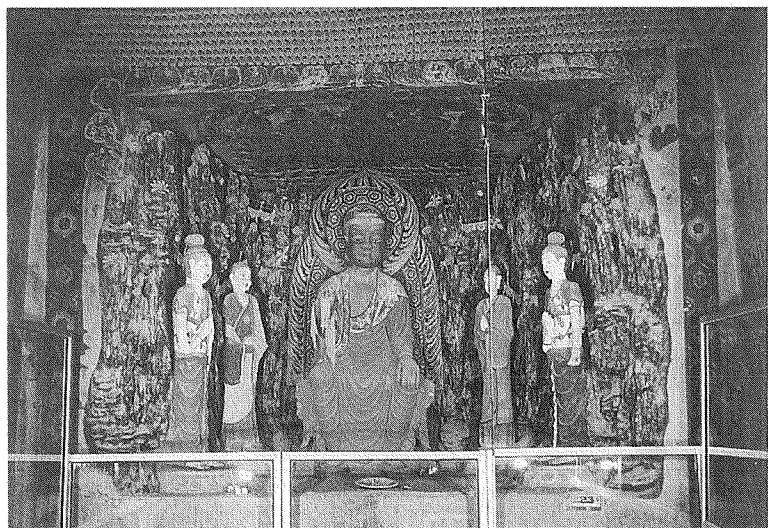


插图25

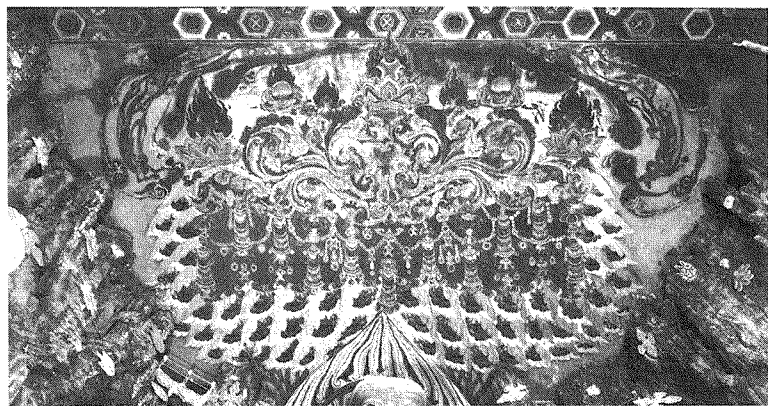


插图26

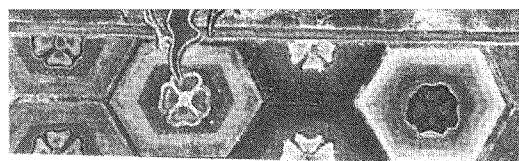
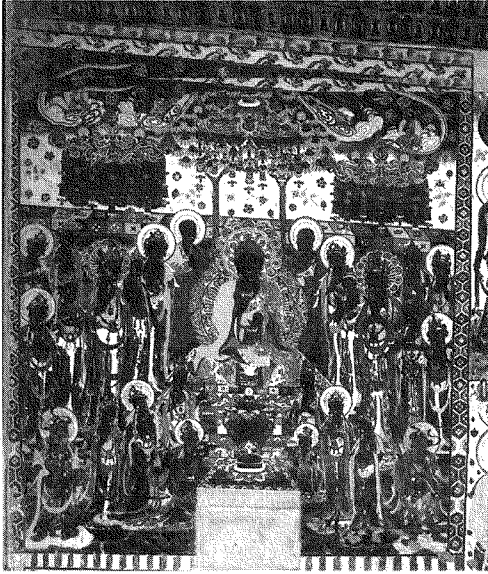


插图27

(五) 二〇五窟との比較

二〇五窟は龕が開かれておらず、方形窟の中央に仏壇が置かれている。この洞窟は漢井部を中心に初唐期に制作されたのち、中断期間を経て盛唐期に造営が再開された。壁画の様式から見て南壁は盛唐期の作である。その南壁のG(挿図28)には三三三窟と同様亀甲文が表されている。



挿図28

さらに南壁のGには「半团花文」も見え(表4の「11」)、この「半团花文」と形状が全く同じなのは、二二七窟西壁龕内北側のH ii(挿図29、表4の「9」と二二七窟南壁左右脇侍菩薩坐像のH ii(表4「10」、挿図12)である。

(六) 一二三窟との比較

また、経変中の建築図をめぐって二二七窟北壁(挿図17、19、21)との近似性が浮かび上がった一二三窟であるが、西壁「龕内龕沿」(C)に、二二七窟と同様斜方格文が(表



挿図29



挿図30

4の「5」、また「四披斜辺」(D)(挿図30)には三二三窟西壁(挿図25、26)と同じ亀甲文が表されている。

この洞窟の制作年代をめぐってはいくつかの問題が存在する。本窟は一九四二年に向達氏によって万歳三年(六九七年)の紀年銘が記録されたが、その後風化して現在は判別不能になっているのだ。⁽⁴²⁾この紀年銘はあったとすれば初期のものであるが、敦煌研究院は『敦煌石窟内容總録』(一九九六)において、この洞窟を盛唐期窟としている。また薄小瑩氏は文様の面から、本窟を開元後期から天宝前期(薄氏分類による第六期)に分類されている。藻井部「垂帳」(Eii)に、第六期のきわだった特徴である、「綴鈴」⁽⁴⁴⁾が見られることも、その根拠の一つとなっていると思われる。一二三窟と二一七窟の間に、文様の面においても関係性が浮かびあがるのである。

五、おわりに

「隋・唐以来きわだつて名族となった」と文書に記される陰氏の洞窟二一七窟は、八世紀初頭という初唐期から盛唐期への過渡期において、当時の莫高窟の高水準のわざをもつて制作された洞窟と考えられる。

特に石榴花文、「側捲弁宝相花文」が大いに発展をとげた時期を経て次の時代へ移行していく段階において、二一七窟では幾何学文がかなり目立った形で再興し、この現象から他の盛唐期諸窟との関係性が浮かび上がってきた。

薄小瑩氏が述べるように、文様という一側面の分析によって示される時代区分は、窟内の他の様々な要素によって示される時代区分と必ず一致するというわけではないだろう。

しかし二一七窟の文様帯に見られた現象を、同窟の主要尊像図や建築図、そのほか西壁龕の形状の特徴など諸方面による分析結果と合わせて考えたとき、二一七窟には、初唐期に流行した要素も見られる一方で、盛唐期との説が有力な一二三窟や、初唐期末であっても制作年代の議論の余

地が残る三三窟、そして盛唐塑像の代表作がある二〇五窟との関連性が顕著に認められるのである。このことは、二一七窟には盛唐期の到来を告げる新要素が確実にあらわれていることを意味していると考えられる。

また筆者は、二一七窟の造形上の特徴を他の洞窟との比較において認識することと、二一七窟の制作年代を断定することは、互いに関連しながらも個別の作業であると考えられている。二一七窟の制作年代を断定することができるような論証と資料の補充は、今後の課題としたい。

今後分析と比較の軸を増やすことによって、多角的な分析から導きだされる見解にたどりつきたいと考えている。

〔付記〕 本稿は二〇〇〇年敦煌学国際学術討論会（二〇〇〇年七月二十九日―八月三日、於中国・敦煌研究院）における中国語発表原稿に加筆した上で、内陸アジア出土古文獻研究会（二〇〇〇年十二月十六日、於東洋文庫）にて報告を行った際の、日本語原稿に基づいている。これまでの实地調査に際し、樊錦詩院長はじめ敦煌研究院諸氏のご高配を賜わった。ここに記して衷心より謝意を表したい。

註

（１） 筆者はここで、あくまでも「莫高窟における盛唐期の始まり」という表現をしておきたい。敦煌における時代区分と、長安や他地域における時代区分との間に如何なる異同が存在するのかについては、ここでは述べていない。

（２） 以下、引用文献については本稿末尾に付した【引用文献目録】を参照。

（３） 宋の嚴羽の滄浪詩話に始まるといわれる。

（４） 史葦湘、一九八二年十一月、一七七頁。

（５） 賀世哲、一九八六、二〇〇頁。

（６） 樊錦詩、一九八八、一頁。

（７） 賀世哲、一九八六、二〇三―二〇四頁。

（８） 池田温、一九六五年三月、二二頁。ここで一つ考えなければならぬことは、供養者銘が入れられた年と、窟内の塑像や壁画の完成した年が一致しない可能性もあるということだ。例えば、後述するように、莫高窟一二三窟には六九七年にあたる紀年銘があったとされているが、窟内壁画は盛唐期の作であるとする意見が多い。

（９） 以下、洞窟内の測量値は石璋如、一九九六、図二二四による。

（１０） 筆者の調査記録より。

(11) 『敦煌莫高窟供養人題記』、一九八六、九九一〇一頁。

(12) 主室窟頂が伏斗形をなし、西壁に龕が開かれている方形窟。山崎、一九九九、三四一・三四六頁。本稿では、次の洞窟を二七窟との比較対象とする。五一、六八、七一、二〇四、二二一、二二〇、二四二、二八三、二八七、三三一、三三二、三三三、三三八、三三九、三三一、三三四、三三五、三三八、三三九、三四〇、三四一、三七二、三七三、三七五、三八六窟(以上、「伏斗頂・西壁一龕窟」。七七、二〇五、二〇九、三三二、三三三、三七一窟(以上、非「伏斗頂・西壁一龕窟」)。

これらは、「時代別窟一覽」(一九八二)、史葦湘氏論文(一九八二年十一月)、『敦煌石窟内容總録』の各窟の項(一九九六)の三文献のうち、いずれか一つでも初唐前期と見なして、かつ薄小龕氏論文(一九九〇)で貞観前期から開元前期に分類されているもの。薄氏論文で大業年間後期から武徳年間に分類されている洞窟をここに含めなかったのは、考察の焦点が隋末唐初の洞窟にないため。

これらの中には、前者三文献の見解が、二一七窟と同様、初唐期と盛唐期に分かれるものが含まれている(三二三、三三八窟)。これらを本稿では、「過渡期窟」と呼ぶ。

さらに、貞観十六年(六四二)の紀年銘のある二二〇窟を

貞観期の基準作、六八六年から七〇三年にかけての紀年銘がある三三五窟を則天武后期の基準作とした。また、三二二窟は、後述するように、隋代に流行した複式龕の形式を踏襲していることなどから、二二〇窟よりも早い洞窟として位置づけた。

さらに、二一七窟と比較する盛唐前期窟として、右記三文献がいずれも盛唐前期窟と見なしている洞窟群の中から、三八七、一〇三、一二三、四五窟(以上、「伏斗頂・西壁一龕窟」、二〇五窟(非「伏斗頂・西壁一龕窟」)を選択した。これは、筆者の実地調査が可能であったことに加え、公刊資料が豊富であるため。

筆者はこれらに対して実地調査をさせて頂き、比較の焦点を「伏斗頂・西壁一龕窟」に置きながら、適宜、非「伏斗頂・西壁一龕窟」を参考にした。

(13) 但し筆者はこれを制作年代の問題と特に結びつけて考えではおらず、二一七窟の形状把握にとどめておく。

(14) 以下、本稿で“内におさめた用語は、中国語用語を日本の当用漢字によつて表記したもの。

(15) 筆者の調査記録より。

(16) 以上の装飾文様の分類と流行期間は薄小龕、一九九〇、三六二―三七七頁参照。

(17) 山崎、一九九九、三四八頁。

(18) 以下、山崎、一九九九、図七に示した「西壁龕の各部名称」を用いて記述する。これを本稿挿図5に再録する。

(19) 但し二二〇窟の西壁龕は注目すべき例である。その形状の特異性を筆者に示唆されたのは北京大学の馬世長氏である。

(20) “一団花二半団花”とは、細長い文様帯の中央に円形の花文、両縁に半円形の花文を配置するというパターンが繰り返されるものをいう。

(21) 『敦煌莫高窟供養人題記』、一九八六、九九—一〇一頁。

(22) 池田温、一九六五年十二月、四七頁。

(23) 施萍婷・賀世哲、一九八一、二〇五頁に列挙された初唐期の法華經變の諸例のうち、三三一、三三二窟を除く六八、二〇二、三三三、三四〇、三四一窟は、いずれも西壁龕頂に見宝塔品が表されている。三三二窟は中心柱窟で、人字披窟頂の西面中央に見宝塔品が描かれている。この位置は、洞窟に入って正面に見える、中心柱東面の塑像の仏立像と左右脇侍菩薩立像の上方にある。洞窟に入った者が正面の塑像を仰ぎ見ると、その上方の見宝塔品が目に入るという構成は、「伏斗頂・西壁一龕窟」の龕頂に見宝塔品を配置するという発想に近いのではないか。

(24) 施萍婷・賀世哲、一九八一、二〇五頁の表。

(25) 山崎、一九九六、十五頁。

(26) 秋山光和、一九八二、一九七—一九八頁。

(27) 東山健吾、一九九六、一五九頁。勝木言一郎、一九九二、八六頁。

(28) 秋山光和、一九八二、一九八頁。

(29) 樓閣によって浄土を象徵するという考え方については鄧健吾、一九八〇、十八頁を参照。

(30) 一二三窟南壁は部分的に写真が公開されているだけで、壁面全体の写真は公開されていない。筆者の実見したところによると、挿図18の下には、衣を偏袒右肩にまとい右腕を屈臂し、左手を左膝の上に置いて坐す中尊の両脇に、弟子立像二体と菩薩立像二体、さらに画面両端には如来形の坐像が各一体ずつ描かれ、これは父子相迎会とおぼしい。

(31) 山崎、一九九九、三四三—三四四頁、図二—三。

(32) 國學院大學の三宅俊彦氏の示唆による。

(33) 向達、一九五〇、十七頁。

(34) 使用した図録を簡条書にする。

PAUL PELLIOI, LES GROTTES DE TOUEN-
HOUANG, PARIS, LIBRAIRIE PAUL GEUTHNER,
1914-1924.

『敦煌藻井圖案』、中央美術學院實用美術系研究室編、人民美術出版社、北京、一九五三年。

『敦煌唐代圖案選』、敦煌文物研究所編、人民美術出版社、北京、一九五九年五月。

『中国石窟 敦煌莫高窟』第三卷、敦煌文物研究所編、平凡社、東京、一九八一年十二月。

『中国美術全集 絵画編十五 敦煌壁画』下、敦煌研究院編、上海人民美術出版社、上海、一九八八年五月。

『中国美術分類全集 中国壁画全集 敦煌五 初唐』中国壁画全集編輯委員會編、遼寧美術出版社、瀋陽、一九八九年七月。

『中国美術分類全集 中国壁画全集 敦煌六 盛唐』中国壁画全集編輯委員會編、天津人民美術出版社、天津、一九八九年十二月。

『中国美術全集 彫塑編七 敦煌彩塑』敦煌研究院編、上海人民美術出版社、上海、一九八九年十二月。

『敦煌石窟鑑賞叢書』第二輯第七分冊第二一七窟、甘肅人民美術出版社、蘭州、一九九二年八月。

石璋如『中央研究院歷史語言研究所田野工作報告之三 莫高窟形』第三冊、中央研究院歷史語言研究所、台北、中華民國八五年（一九九六年）四月。

『敦煌石窟芸術 莫高窟第三二一窟、第三二九窟、第三三五窟（初唐）』、梁尉英編著、江蘇美術出版社、一九九六年十二月。

『敦煌石窟鑑賞叢書』第三輯第六分冊第三二三窟、敦煌研究院編、甘肅人民美術出版社、蘭州、發行年未記載。

『敦煌石窟鑑賞叢書』第二輯第八分冊第四五窟、敦煌研究院編、甘肅人民美術出版社、蘭州、一九九二年八月。

(35) 以下、裝飾文様のあらわされる窟内位置を示すアルファベットは挿図22を適宜参照。

(36) 宝相花の最外層が側面形の対葉からなるもの。

(37) 関友恵、一九八〇、一〇三頁。

(38) 段文傑、一九八一、一七二—一七三頁。

(39) 作例は七一窟B、三三二窟B、三三二窟B、三三四窟B・Gなど。

(40) 作例は七一窟C、三三一窟E ii、三三一窟E ii、三三二窟西壁龕下部、三三四窟E ii・東壁門上G、三三五窟C・E ii、三四〇窟B、三四一窟C・E iiなど。

(41) なお三二三窟の説話を論じた馬世長氏論文（一九八二）において、馬氏は三二三窟の制作年代に言及されていない。これは、三二三窟の制作年代について結論を下すことには慎重になるべきだとの見解に基づいていることを、一

九九八年に馬世長氏（当時成城大学大学院客員教授）が口頭で筆者に述べられた。

(42) 向達、一九五〇、十七頁。

(43) 賀世哲氏はかつて本窟を初唐期末の洞窟とされた（賀世哲、一九八六、二〇三—二〇四頁）。しかしこの論文が執筆されてから既に十四年の年月が経過していること、そしてたとえ紀年銘があっても、洞窟全体の制作年代がそれによって決定づけられることにはならないことも合わせ、洞窟の制作年代にはなお慎重な検討が必要であることを、二〇〇〇年敦煌学国際學術討論会で述べられた。

(44) いくつかの鈴が連なつて垂れるモチーフ。挿図30中央に見える。

【引用文献目録】

向達「西征小記」、『国立北京大学国季刊』第七卷第一号、北京、一九五〇年七月。向達『唐代長安与西域文明』（生活・読書・新知三聯書店、北京、一九五七年四月）に再録。

池田温「唐朝氏族志の一考察——いわゆる敦煌名族志残卷をめぐって」、『北海道大学文学部紀要』十三—二、札幌、一九六五年三月。

池田温「八世紀初における敦煌の氏族」、『東洋史研究』二四—

三、京都、一九六五年十二月。

鄧健吾「敦煌莫高窟第二二〇窟試論」、『仏教芸術』一三三号、東京、一九八〇年十一月。

関友恵「敦煌莫高窟早期圖案紋飾」、『敦煌学輯刊』第一集、蘭州、一九八〇年二月。〔敦煌吐魯番芸術叢書 敦煌圖案〕馬世長編、新疆美術攝影出版社「中国」・霍蘭德出版有限公司「ニュージーランド」、一九九二年五月に再録。

賀世哲「敦煌莫高窟供養人題記校勘」、『中国史研究』一九八〇—三、北京、一九八〇年九月。

『中国石窟 敦煌莫高窟』第三卷、敦煌文物研究所編、平凡社、東京、一九八一年十二月。

段文傑「唐代前期の莫高窟芸術」、『中国石窟 敦煌莫高窟』第三卷、平凡社、東京、一九八一年十二月。

施萍婷・賀世哲「敦煌壁画中の法華経變について」、『中国石窟 敦煌莫高窟』第三卷、敦煌文物研究所編、平凡社、東京、一九八一年十二月。

馬世長「莫高窟第三二三窟仏教感應故事画」、『敦煌研究』試刊第一期、蘭州、一九八二年六月。

『敦煌莫高窟内容總録』敦煌文物研究所整理、文物出版社、北京、一九八二年十一月。

史韋湘「關於敦煌莫高窟内容總録」、『敦煌莫高窟内容總録』、敦

煌文物研究所整理、文物出版社、北京、一九八二年十一月。

秋山光和「唐代敦煌壁画にあらわれた山水表現」、『中国石窟

敦煌莫高窟』第五卷、平凡社、東京、一九八二年十二月。

「莫高窟時代別窟一覽」、『中国石窟 敦煌莫高窟第五卷付篇 敦

煌莫高窟内容總録』、敦煌文物研究所編、平凡社、東京、一

九八二年十二月。

史葦湘「世族与石窟」、『敦煌研究文集』敦煌文物研究所編、甘

肅人民出版社、蘭州、一九八二年三月。(二一七窟の題記の考

証の部分の記述は史葦湘「關於敦煌莫高窟内容總録」一九八

二年十一月とほぼ同じである。)

「敦煌莫高窟供養人題記」、敦煌研究院編、文物出版社、北京、

一九八六年十二月。

賀世哲「從供養人題記看莫高窟部分洞窟的營建年代」、『敦煌莫

高窟供養人題記』、敦煌研究院編、文物出版社、北京、一九

八六年十二月。(二一七窟に關する記述は、賀世哲氏一九八〇

年論文とほぼ同じである。)

関友恵「莫高窟唐代図案結構分析」、一九八三年全国敦煌學術

討論會文集『石窟藝術編』下、甘肅人民出版社、蘭州、一九

八七年二月。(『敦煌吐魯番藝術叢書 敦煌図案』馬世長編、

新疆美術攝影出版社「中国」・霍蘭德出版有限公司「ニュージー

ランド」、一九九二年五月に再録。)

樊錦詩「莫高窟唐前期石窟的洞窟形制和題材布局——敦煌莫高窟

唐代洞窟研究之一(摘要)」、『敦煌研究』一九八八年第二

期(總十五期)、蘭州、一九八八年五月。

薄小瑩「敦煌莫高窟六世紀末至九世紀中葉的裝飾図案」、『敦煌

吐魯番文獻研究論集』第五輯、北京大學中古史中心編、北京

大學出版社、北京、一九九〇年五月。(『敦煌吐魯番藝術叢

書 敦煌図案』、馬世長編、新疆美術攝影出版社「中国」・霍

蘭德出版有限公司「ニュージールランド」、一九九二年五月に再

録。)

勝木言一郎「敦煌莫高窟第二二〇窟阿弥陀淨土變相図考」、『仏

教藝術』二〇二号、東京、一九九二年五月。

東山健吾「敦煌三大石窟」講談社、東京、一九九六年四月。

石璋如「中央研究院歷史語言研究所田野工作報告之三——莫高窟

形」第二冊、中央研究院歷史語言研究所、台北、中華民國八

五年(一九九六年)四月。

「敦煌石窟内容總録」敦煌研究院編、文物出版社、北京、一九

九六年十二月。(『敦煌莫高窟内容總録』一九八二年の莫高窟

各窟に關する記述が再録されている。)

山崎「敦煌莫高窟・唐前期壁画における制作技法の變化——型」

と画面構成の關係——『美学』第四七卷三号(一八七号)、東

京、一九九六年十二月。

山崎「敦煌莫高窟・初唐壁画の研究——「宝楼阁图」による技術的傾向の分類——」、『鹿島美術研究 年報第十六号別冊』、鹿島美術財団、東京、一九九九年十一月。

山崎「初唐敦煌莫高窟大幅浄土変之建築図——試論貞觀時期和武則天時期莫高窟の某些特点——」、『西北民族研究』二〇〇〇年第一期、蘭州、二〇〇〇年五月。

【図版リスト及び図版出典一覽】

(挿図1) 莫高窟二二七窟前室・甬道・主室の平面図。石璋如、一九九六、図二二四に筆者が調査記録に基づいて加筆したもの。測量値の単位はメートル。

(挿図2) 莫高窟二二七窟主室・甬道・前室の断面図。石璋如、一九九六、図二二四に筆者が調査記録に基づいて加筆したもの。測量値の単位はメートル。

(挿図3) 莫高窟二二七窟甬道の立面図。筆者の現地におけるスケッチ。

(挿図4) 莫高窟二二七窟西壁。『中国美術分類全集 中国壁画全集 敦煌六 盛唐』中国壁画全集編輯委員会編、天津人民美術出版社、天津、一九八九年、図一。

(挿図5) 西壁龕の各部名称。山崎、一九九九、図七を再録。

(挿図6) 莫高窟三三一窟西壁龕。『中国石窟 敦煌莫高窟』第

三卷、平凡社、東京、一九八一年、図七三。

(挿図7) 莫高窟四五窟西壁龕。挿図6前掲書の図一二四。

(挿図8) 莫高窟二一七窟西壁龕頂。挿図4前掲書の図三。

(挿図9) 莫高窟二一七窟西壁龕下部、女子供養者群像の第八体目。筆者による調査時のスケッチ。

(挿図10) 莫高窟二一七窟西壁龕下部、男子供養者群像の第八体目。筆者による調査時のスケッチ。

(挿図11) 莫高窟二一七窟南壁、法華経変。挿図6前掲書の図一〇〇。

(挿図12) 莫高窟二一七窟南壁、左脇侍菩薩坐像。挿図4前掲書の図二〇。

(挿図13) 挿図12の描き起こし。

(挿図14) 莫高窟一〇三窟南壁、右脇侍菩薩坐像。挿図6前掲書の図一五二。

(挿図15) 挿図14の描き起こし。

(挿図16) 挿図13(莫高窟二一七窟南壁、左脇侍菩薩坐像)と挿図15(莫高窟一〇三窟南壁、右脇侍菩薩坐像)の重ね合わせ。

(挿図17) 莫高窟二一七窟北壁、観無量寿経変。挿図6前掲書の図一〇三。

(挿図18a) 莫高窟二二三窟南壁、阿弥陀経変(※註)の東側

上部。挿図4前掲書の「図版説明」四八頁。

(挿図18b) 莫高窟一二三窟南壁の西側上部。挿図4前掲書の「図版説明」四九頁。

(挿図19) 莫高窟二一七窟北壁の建築図(挿図17の第八番)。挿図4前掲書の図四〇。

(挿図20上段) 莫高窟一二三窟南壁東側建築図における立体表現。

(挿図21) 莫高窟二一七窟北壁の建築図(挿図17の第二番)。挿図4前掲書の図四一。

(挿図22) 裝飾文様の描かれる窟内位置。

(挿図23) 莫高窟三三三窟西壁。挿図6前掲書の図十六。

(挿図24) 莫高窟三三三窟西壁、龕外龕沿の斜方格文。『中国美術分類全集 中国壁画全集 敦煌五 初唐』中国壁画全集編輯委員会編、遼寧美術出版社、瀋陽、一九八九年、図二六。

(挿図25) 莫高窟三三三窟西壁。『敦煌石窟鑑賞叢書』第三輯第六分冊第三三三窟、敦煌研究院編、甘肅人民美術出版社、蘭州、図一。

(挿図26) 莫高窟三三三窟西壁龕頂。挿図24前掲書の図一四三。

(挿図27) 莫高窟三三三窟西壁、龕内龕沿。挿図26の一部分。

挿図24前掲書の図一四三。

(挿図28) 莫高窟二〇五窟南壁。挿図4前掲書の図五〇。

(挿図29) 莫高窟二一七窟西壁、龕内北側。挿図4前掲書の図九。表4の「9」はこの挿図の一部分。

(挿図30) 莫高窟一二三窟窟頂、四披斜辺(窟頂四斜面間の縦方向の文様帯)。挿図6前掲書の図七一。

※挿図18aの註「敦煌研究院では、阿弥陀経変と観無量寿経変を、阿弥陀浄土の情景を表した中台の他に、序分儀と十六観の両縁があるか否かによって区別しているが、この区別の方法に同意しない意見もある。本稿ではこの問題にはふれず、各経変名は『敦煌石窟内容總録』(一九九六)の記述に従う。

表4各図版については表4凡例を参照。図版出典のみ以下に列挙する。

(表4「1」) 挿図6前掲書の図九五。

(表4「2」) 挿図6前掲書の図九八。

(表4「3」) 筆者による調査時のスケッチ。

(表4「4」) 挿図6前掲書の図九八。

(表4「5」) 筆者による調査時のスケッチ。

(表 4 [6]) 挿図 6 前掲書の図一〇二。

(表 4 [7]) 筆者による調査時のスケッチ。

(表 4 [8]) 筆者による調査時のスケッチ。

(表 4 [9]) 挿図 6 前掲書の図九八。

(表 4 [10]) 挿図 6 前掲書の図一〇二。

(表 4 [11]) 筆者による調査時のスケッチ。

(表 4 [12]) 挿図 6 前掲書の図一〇四。

(表 4 [13]) 挿図 6 前掲書の図一〇九。

(表 4 [14]) 筆者による調査時のスケッチ。

(表 4 [15]) 挿図 4 前掲書の図五〇。

『中国美術全集 絵画編十五 敦煌壁画』下、敦煌研究院編、上海人民美術出版社、上海、一九八八年、図五一。